

個別指導の充実

- 1 個別指導の必要性
- 2 個別指導を進めるために
 - (1) 学校生活支援シート（個別の教育支援計画）の活用
 - (2) 特別支援教室との連携
- 3 学習面から生徒を支える



國里 和矢 «歩いている牛»

1 個別指導の必要性

都教育委員会が、平成26・27年度に実施した、「通常の学級における発達障害の児童・生徒等の在籍状況や支援の実態を把握するための調査〈東京都調査〉」では、都内の公立中学校の通常の学級に在籍する生徒の中で、校長が「支援」の必要があると考えている生徒の割合は、5.0%という結果でした。この調査から、どの学級にも一人ないし二人程度、支援を必要とする生徒が在籍していることとなります。

中学校で支援を必要とする生徒には、様々な実態があります。

- 漢字の読み書きが苦手
- 英単語の読み書きが苦手
- 情報を読み取り、説明することが苦手 など

教員は、生徒の気持ちを大切に、抱える課題に応じて、学習等の環境を整え、適切な支援を行うことで、学習意欲の喚起や自尊感情を培い、希望や期待がもてるようにすることが大切です。

しかし、様々な生徒の状況から、適切な支援が受けられていないこともあります。

- 自己の状況を十分に把握できていない
- 困った状況を伝えることが難しい
- 支援を受けることに対して消極的

個別指導

中学校の通常の学級において特別支援教育の視点を取り入れ、個別指導を行うことは、「困難の改善・克服への生徒自身の積極的な取組」を促すこととなります。

教員が特別支援教育の視点から生徒を理解し、生徒理解に基づく支援を行うことが、とても重要となります。

生徒が、困難に対する改善や克服できる方法が分かると、支援に対して希望や期待をもち、困難の改善・克服に向けて積極的に取り組むようになってきます。

2 個別指導を進めるために

(1) 学校生活支援シート（個別の教育支援計画）の活用

支援が必要な生徒に対して、個別指導を進めるに当たり、「『読めた』『わかった』『できた』読み書きアセスメント～中学校版～活用&支援マニュアル編（平成30年3月）」により、実態を把握し、学校生活支援シート（個別の教育支援計画に）を活用して、一人一人の困難な状況に応じた、適切な支援を行うことが大切です。

特別な支援を必要とする生徒への指導・支援は、特定の担当教員のみが行うものではなく、全ての教員で取り組む必要があります。

中学校においては、教科により担当する教員が違うことから、全ての教員が、支援の目的や、指導・支援の内容・方法、生徒の変化、有効であった支援等を、共有するためにも、学校生活支援シート（個別の教育支援計画）を活用することは、とても重要となります。

学校生活支援シート (個別の教育支援計画)						平成 年度作成	
本人	フリガナ	性別	生年月日				
	氏名		平成 年 月 日生				
	住所	保護者氏名					
	障害名	緊急連絡先	愛の手帳	度	(平成 年 月 交付)		
	障害の様子	身障手帳	種	級	(平成 年 月 交付)		
学校					校長名		
					担任名		
備考							
1 学校生活への期待や成長への願い(こんな学校生活がしたい、こんな子供(大人)に育ってほしい、など)							
本人から							

(→P40、41)

平成29年3月に公示された新中学校学習指導要領には、特別支援学級に在籍する生徒や通級による指導を受ける生徒について、個々の生徒の実態を的確に把握し、学校生活支援シート（個別の教育支援計画）や個別指導計画を作成し、活用することが示されました。

また、通常の学級においても、障害のある生徒などについて、長期的な視点で生徒への教育的支援を行うために、学校生活支援シート（個別の教育支援計画）を作成し、活用することに努めることとされました。

全ての学校において、生徒の状態を的確に把握し、保護者、教育、保健・医療、福祉等が連携し、学校生活支援シート（個別の教育支援計画）を作成、活用し、支援を行う必要があります。

(2) 特別支援教室との連携

特別支援教室での特別な指導を受ける生徒については、通常の学級での指導に加え、特別支援教室で個別指導を行う場合や、特別支援教室の巡回指導教員と協働して指導を行う場合があります。

学級担任、教科担当教員と特別支援教室の巡回指導教員が協働することにより、生徒一人一人が抱える困難さを効果的に改善し、生徒の学習能力や集団適応能力の伸長を図ることができます。

通常の学級での生徒の学習状況を踏まえ、特別支援教室で個々の状況に合わせて指導を工夫し、さらに、特別支援教室で身に付けた力を通常の学級で発揮できるようにすることが大切です。

短期個別指導計画及び連携型個別指導計画の活用

【短期個別指導計画の活用】

氏名	学年/学級	指導科目	指導期間	指導回数	指導内容
A	小学3年生	算数	10月3日	1回	10月3日
			10月10日	2回	10月10日
			10月17日	3回	10月17日
			10月24日	4回	10月24日
			10月31日	5回	10月31日

学級担任、教科担当教員と巡回指導教員が共に、生徒の実態を把握して、1ヶ月単位など、短い期間での目標設定し、スモールステップの指導を行います

(→P42)

【連携型個別指導計画の活用】

- 通常の学級での生徒の困難やつまずきの様子を明確にし、校内で情報を共有します。
- 特別支援教室での学習状況を把握し、小テストや発表等、意図的に学習内容に取り入れ、当該生徒が活躍できる場をつくります。

通常の学級
(各教科等の指導)

学校	年 氏名
白鷺小学校	通級による指導担当
平成 年 月 日作成	記載者

◎指導目標 (長期目標)

在籍学級での目標

(1)

(2)

(3)

通級による指導での目標

(1)

(2)

(3)

◎短期目標と手だて及び評価

●在籍学級 (期間:平成 年 月～平成 年 月) 評価 (評価口)

短期目標

(→P43)

特別支援教室
(自立活動)

- 特別支援教室の自立活動で学習している内容や生徒の習得状況を校内で共有します。
- 生徒の通常の学級での様子から、特別支援学級での学習内容に工夫を加え、学習等の定着を図ります。

3 学習面から生徒を支える

(1) 漢字の読み・書きの支援（実践事例 P10～16 参照）

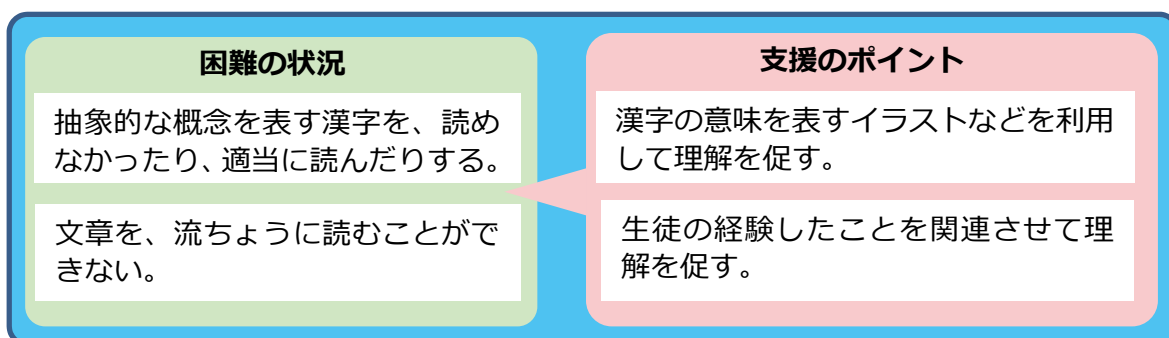
読むこと、書くことは、全ての学習で重要となります。中学校の学習では、多くの漢字が使用されています。漢字の読み書きが苦手だと、文章を流ちょうに読めなかったり、適当に読んでしまったりするため、内容の要点を読み取ることが難しくなります。そのため、生徒は学習に対して消極的になります。

漢字の読みと書きの支援を併せて指導すると効果的に学習の成果の定着を図ることができます。

① 漢字の読みの支援

漢字の読みが苦手な生徒は、漢字の意味が分かっていない場合や抽象的に捉えることが困難な場合があります。そのため抽象的な漢字の読みが苦手です。

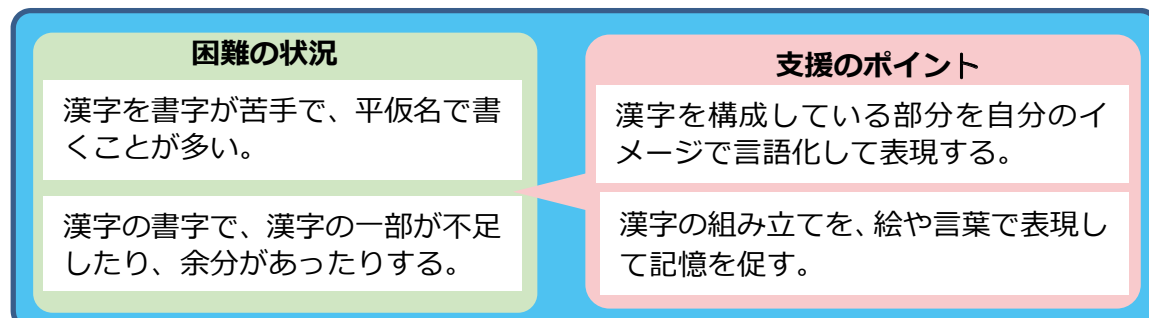
漢字の意味を理解させ、生徒の経験と関連させてイメージをもてるようにしたりします。



② 漢字の書きの支援

漢字の書きが苦手な生徒は、ワーキングメモリの弱さから記憶する、視覚認知の弱さから全体を捉えることが苦手な場合があります。

漢字の意味を生徒自身の知識と関連付けたり、漢字をいくつかに分解し、構成をイラストや言葉で表現させるなど、視覚的なイメージと関連させたりします。

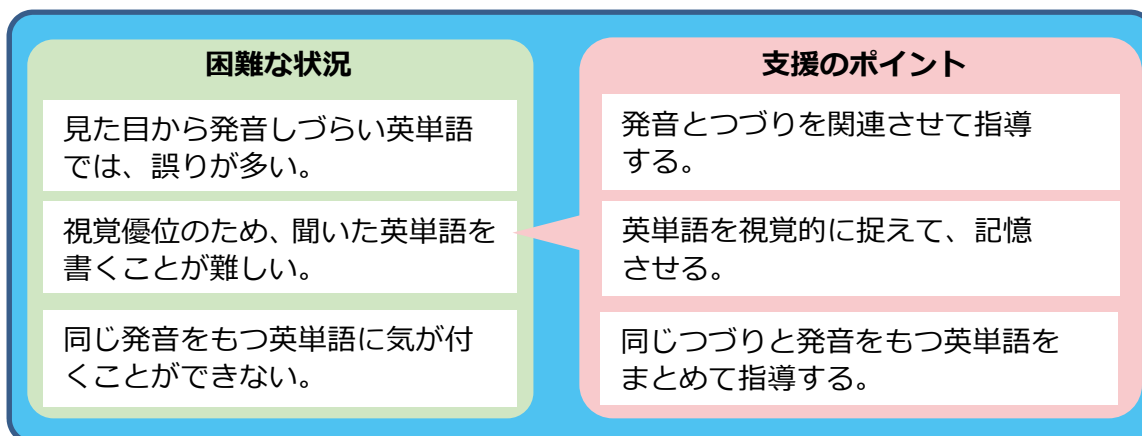


書くことが苦手な状況を考慮し、パーソナルコンピュータなどの書字の代替手段も有効に活用します。

(2) 英単語のつづりの支援 (実践事例 P17~21)

英単語を正確に書けない生徒は、音の構成とアルファベットの知識の不足が考えられ、つづりと発音を関連させて書くことができない場合があります。また、ワーキングメモリの弱さから記憶すること、視覚認知の弱さから全体を捉えることが苦手な場合があります。

アルファベットカードを提示し、つづりと発音を答えさせ、つづりと発音を対応させたり、つづりの穴埋めで英単語を完成させる課題を行うなど、視覚的認知の形成を促したりします。



(3) 情報の読み取りの支援 (実践事例 P22~27)

文章読解の力は、文章の一部の内容に関する理解から、文章の全体を捉える理解へと発達します。また、文章の記述されている内容の理解から、文章に記述されていない、読み手の知識や一般的知識を使って推論した内容の理解へと進みます。

情報の読み取り

情報の読み取りについて、図表のどこを見たら情報が読み取れるのか分からない場合があります。図表の重要なところを把握し、判断することが苦手な場合があります。

無関係な情報を外したり、同じカテゴリで置き換えたり、いくつかの文章を違う文章で短く表現させたりし、図表を構成するグラフ等の読み取りを、一つ一つ指導します。

